

イントロダクション

サクラマスってどんな魚？

森田健太郎（北海道区水産研究所）

森田 健太郎（Kentaro Morita）

奈良県出身。1974年生まれ。2002年北海道大学水産科学研究科博士課程修了（水産科学博士）。学位論文のテーマは砂防ダム建設による生息地分断化がイワナに及ぼす影響。日本学術振興会特別研究員を経て、2003年より水産総合研究センター北海道区水産研究所に勤務。深山幽谷のイワナ調査からベーリング海のサケ調査まで、陸・海にまたがる調査に従事。趣味は日本固有のサケ科魚類の水中写真を撮ること。著書に「サケ・マスの生態と進化」（分担執筆，文一総合出版）「水生動物の性と行動生態」（分担執筆，恒星社厚生閣）。



桜の咲く頃が旬で、秋は桜色になるサクラマスは、主に北日本で見られる魚です。世界的には、台湾の大甲溪を南限とし、日本海周辺地域、サハリン、およびカムチャツカ半島にも生息しています。サクラマスの分布の中心は、ちょうど北海道です。サクラマスの学名は*masou*（ます）で、日本的な印象も感じます。ほかの太平洋にすむサケマス（Pacific salmon）は、極東アジアから北アメリカまでの広範囲に棲むのと比べると、サクラマスはアジア固有の珍しい魚です。さらに、日本海が孤立していた太古の時代にそこで出現したサクラマスが発点となり、北太平洋のサケの仲間が誕生したといわれています。

サクラマスは、海と川を行き来する回遊魚です。稚魚は冬に溪流で生まれ、その後の約一年半を川で過ごします。川にすんでいる間は、ヤマメと呼ばれ、溪流釣りの対象として馴染みのある魚です。また、川の中ではなわばりを作り、川虫や周りの木から落ちてくる虫を餌としています。二年目の春になると、体色が銀色に変わり、海水に適応できる体になります。これは、「銀毛」または「スモルト」と呼ばれます。春に海に下ったサクラマスは、沿岸域を北上し、夏はオホーツク海で過ごします。冬が近づくと日本近海まで南下し、三年目の春になると生まれた川をめざして遡上するようになります。海での餌は、イカナゴなどの小魚が中心になります。川に遡上したサクラマスは、産卵までの約半年間を川で過ごさなければなりません。川に遡上したばかりは積極的に餌を食べることもありますが、その後は餌をとることは少なく、絶食するものが多くなります。そして、紅葉が始まる頃になると、体色は鮮やかで美しい朱色となり、産卵が行われます。産卵を終えたサクラマスは、3年という短い生涯を終えます。

一方、海へ下ることなく、ヤマメのままで一生を終えるものもあります。これは、「河川残留型」と呼ばれ、オスに多く見られます。河川残留型となったヤマメは、産卵に参加した後も死ぬことなく、長い場合は3年連続で産卵に参加することもあるようです。全てのサクラマスがこれらのような一生を遂げるわけではありませんが、以上が北海道の典型的なサクラマスの一生です。

サクラマスは、漁業、遊漁、川遊び、食料、教育といった面で、人とのかかわり合いの深い魚です。北海道では毎年50万尾前後のサクラマスが漁獲され、鮭の仲間ではとても美味しい魚として知られています。また、ヤマメの新仔釣りや甘露煮は、北海道の文化として定着しているといっても過言ではないでしょう。このように、サクラマスは、北日本を代表するふるさとの魚といえると思います。しかし、そのサクラマスを取り巻く自然環境は、経済成長の影で大きな変貌を遂げました。おそらく、このフォーラムに来て頂いた方々は、そういった河川環境に関心があり、サクラマスや川の生態系、ひいては生物多様性を大切にしたいと考えておられる方が多いのではないのでしょうか？ このフォーラムでは、サクラマスと川の生態系をどのように保全し、つきあって行くべきなのか、来場者を交えて考えたいと思います。



1年目5月：生まれて間もない稚魚



2年目5月：間もなく海へくだる銀毛



3年目9月：サクラマスの雄



サクラマスの雌(右)と河川残留型の雄(左)